

代 表 者

行 政 視 察 報 告 書

平成 30 年 2 月 28 日

各 会 派 代 表 者 殿

呉市議会議員

沖 田 範 彦

次のとおり行政視察したので報告します。

1. 視察期日

平成 30 年 2 月 20 日 (火) ~ 2 月 21 日 (水)

2. 調査項目

佐賀県東松浦郡玄海町 薬用植物栽培研究所の運営等について

3. 参加議員

沖田範彦議員

佐賀県東松浦郡玄海町

・調査項目

薬用植物栽培研究所における取り組み

・調査対応者

薬用植物栽培研究所 園長 古館保弘 氏

・調査期日

平成30年2月21日(水) 10:00~12:15

・玄海町の概要

- ・人口：5,700人
- ・世帯数：1,900世帯

・調査目的

近年、漢方薬の効用が見直され、その需要が年々増加してきている状況の中、玄海町では、将来は国産のものが求められてくるとの判断の下、町独自の研究所を立ち上げており、その取り組み方について調査したものである。

・調査内容

【玄海町からの説明】

当研究所は、平成23年に原発交付金60億円（玄海町30億円、鎮西町15億円、佐賀県15億円）を活用し、岸本町長の発案により、九州大学との連携により設立された。

現在約200種類の薬草を試験栽培しており、町おこしの新たな起爆剤とすべく、栽培農家の育成に取り組み、米の収入の4~5倍位にはなるであろうと働きかけている。今現在、9組の農家が新規に取り組み、内2軒が熱心であるとのことである。

薬草はこれまで、中国産が主であり、日本の漢方薬のメーカーである「ツムラ」や「マルゼン」は、中国の栽培農家に生産技術を提供したりして、原材料の確保に努めてきたが、中国の富裕層の拡大による需要が増えて価格が上昇し、また政治的な思惑などにより、だんだんとその調達が厳しくなっている。加えて、乱獲されて土壌が痩せてきているため、生産量が減少してきている。そのような中、国産の原材料の生産が強く求められるようになってきており、町内の産業育成のためにもなると確信を持って取り組んでいる。

現在、日本の総需要の内、70%を中国から輸入しており、その他中央アジア

アのアフガニスタンやタジキスタンからも入ってきているが、純国産の比率を上げる役割を担いたいと意気込んでおられた。

【質疑応答】

Q：薬草栽培の収益はどの位なのか？また、耕作面積は？

A：100トンで1億円位になるであろう。

面積は20ヘクタール

Q：栽培に要する年数は？

A：単年栽培である。薬用メーカーによれば、2年栽培を要望してくるところもある。

Q：休耕田の活用は可能か？

A：畝を作れば大丈夫。根がしっかり下に伸びるよう土壌づくりが必要である。根が大きくなればなるほど、収穫量が増え、生産額も高くなる。

Q：栽培農家では何を栽培しているのか？また、面積は？

A：ミシマサイコ、ヤマトトキなど5種類で約1町歩栽培している。

ミシマサイコの葉と茎はお茶に加工している。

【呉市での展開の可能性】

昨今の薬草の需要は、純国産が求められていることから、その量は大量で全国の遊休農地で栽培されるようになってくるのではないと思われる。

呉市に目を向けると、遊休農地の面積は2000年（平成12年）で648ヘクタールであったものが、2015年（平成27年）には1,142ヘクタールと増加の一途をたどっている。

そのため、土地の有効活用という観点や、周辺他市町に先んじて取り組むという前向きな姿勢で進んでいけば、かつては呉市内にはなかった新しい産業が育つ可能性は十分ある。

ただ、課題は、初期投資にかかる費用の問題や、現有技術（ノウハウ）が今のところ無いといったところではあるが、幸いなことに、広島国際大学呉キャンパスに、薬学専門の神田博史教授がおられ、その指導を受けることができるため呉市の活性化につながる道筋になることには間違いない。